

「主が家を建てる」

2005.5.1 赤羽聖書教会主日礼拝説教

都上りの歌。

ソロモンによる

1. 主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。
主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい。
2. あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧を食べるのも、それはむなしい。
主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる。
3. 見よ。
子どもたちは主の賜物、胎の実は報酬である。
4. 若い時の子らはまさに勇士の手にある矢のようだ。
5. 幸いなことよ。
矢筒をその矢で満たしている人は、
彼らは、門で敵と語る時にも、恥を見ることがない。

説教

詩篇127篇の詩人は、「むなしい」「むなしい」「むなしい」と三度にわたって立て続けに言い放ちます。
一体何がむなしいというのでしょうか。

その一つ目は、「主が家を建てるのでなければ」空しい、と言います。

二つ目は、「主が町を守るのでなければ」空しい、と言います。

1. 主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。
主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい。

そして、これらを総括するかのよう、2節で言います。

2. あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧を食べるのも、それはむなしい。

この場合、「家を建てる」とは、家・家屋の建築という、大工仕事を指しているというよりは、自分の家庭を築く人の姿を意味していると考えられます。「建てる者の働き」と訳されている表現は、「その中で、働き、骨折る」という意味の表現が使われており、人間が、自分の家庭を築き上げるために、単なる労働ではなく、苦勞して、苦勞して、汗を流して、骨身を削って、懸命に努力して奮闘する様を表現しております。

「町を守る」とは、町や国の防衛政策のように、自分たちの生活を破壊する外敵に対して、自分たちの生活の保護 安定を図ろうと

する努力のことです。そして、「早く起きる」、「おそく休む」、「辛苦の糧を食べる」とは、寝る時間を惜しみ、睡眠時間を削り、あらゆる犠牲を払って、これらのために懸命に努力し、苦勞するありさまを意味します。つまり、たとえどんなに犠牲を払い、努力して、「家を建て」、「町を守って」も、**主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしいし、主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい**、と言うのです。

しかも、「主が家を建てるのでなければ ~ 空しい」、「主が町を守るのでなければ ~ 空しい」と、全く同じパターンで強調し、さらにはその直後に「空しい！どんなに犠牲を払って努力しても」とダメ押しし、できる限りの技法を駆使して、これがどんなに「空しい」かを強調しているのです。だから、本当に「空しい」のです。ことばで表現できないくらい、目一杯の表現で言い表したいほど、本当に人の努力は「空しい」のです。「主が家を建てるのでなければ ~ 全く空しい」、「主が町を守るのでなければ ~ 全く空しい」どんな犠牲を払っても、どんなに努力しても、寝る時間を惜しんで働いても、汗を流して苦勞しても、骨身を削って奮闘しても、辛苦の糧を食べても、「主が家を建てるのでなければ」、「主が町を守るのでなければ」、空しい、人の努力や苦勞は全く空しい、と詩人は声の限り叫んでいるのです。

「むなしい」と訳される言葉は、他に、「何も無い・無だ・空虚だ・意味がない・価値がない・役立たず」と訳されます。神さまは栄光に満ちています。神さまは栄光に満ち満ちています。永遠の昔より存在し、天地万物を生み出し、生きとし生けるすべてのものにいのちを与え、生かしておられます。神さまはいのちに満ちておられます。同時に、神さまは恵みとまことに満ちておられます。神さまは、恵みとまことに満ちた栄光をあらわしておられます。万物の意味と目的と価値は、ただこの方にかかっています。神さまは、「主・エホバ・ヤーヴェ」という名が示す通り、万物の先に存在し、万物をあらしめるお方です。すべてのものは、この方によって造られました。この方によらずにできたものは、この世に一つも存在しません。万物の根源です。万物の祝福の基にして、存在の基であられます。神さまはいのちに満ちています。神さまは力に満ちています。

しかし、人間は、そうではありません。神さまの栄光、充実ぶりとは全く対照的に、「空しい」ものです。あるのか無いのかも定かでないほどです。すぐに消えて無くなる露のようです。神さまの前には、「何も無い」者です。「無」に等しい者です。「空虚」な者です。尊厳も、価値も、生きている意味もないほどの者です。人の人生、存在、功績がいかにはかないものか、それがこの「空しい」という言葉に表現されているのです。だから、詩人は、「空しい」「空しい」、「ああ空しい」と、三度言葉を並べ立てることで、その「空しい」人間がいくら努力して頑張ったとしても、ゼロは何倍しても所詮はゼロに過ぎず、たとえ朝は早く起き、夜は遅く寝て、懸命に苦勞して自分の家庭を築き、生活の安定をはかろうとしたとしても、意味がない、価値がない、中身がない、役に立たない、空虚だ、無だ、無に等しいと、人の努力の「空しさ」を強調するのです。

主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしいし、主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい、のです。

空しい人間の手のわざを確かにするものは、主なのです。空しい人の働きを意味あるものにするのは、主なのです。空しい人の働きを価値あるものにするのは、主です。空しい人の働きを尊いものとするのは、主なのです。

事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によります。（ローマ 9:16）

主の祝福そのものが人を富ませるのであって、人の苦勞は何もそれに加えないのです。（箴言 10:22）

だから、詩人が強調して言うように、主が家を建てて下さいます。主が町を守って下さいます。主が家庭を築いて下さいます。主が生活の安定をはかって下さいます。主が守って下さるのです。一家の主は神さまです。私たちではありません。神さまが、我が家の

主なのです。神さまが、すべてを備えて下さるのです。神さまが、私たちに必要な一切を与えて下さいます。「与えて」下さるのです。2節後半の「**主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる。**」の「備えて下さる」とは「与えてくださる」の意味です。しかも、私たちが「眠っている間に」です。つまり、私たちが眠りから覚め、起きてあくせくと働いて努力するその前に（つまり眠っている間に）、与えてくださるのです。努力しないのに、「与えて」くださいます。努力する前から、「与えて」くださるのです。私たちが「眠っている間に」、与えてくださるのです。

どうしてでしょうか？私たちが「愛して」おられるからです。「主はその愛する者には……このように与えてくださる」とあります。神さまは、私たちが愛するその愛の故に、「このように、眠っている間に、与えてくださる」のです。それで、詩人は、誰にでもよくわかる良い実例として、「子ども」のことを例に挙げます。

3. 見よ。

子どもたちは主の賜物、胎の実は報酬である。

「見よ！」とあるのは、誰にでもわかる実例を、实际的に、具体的に示そうとしているからです。子どもたちのことを見てみなさい、そうしたらよくわかる、というわけです。何がわかるのでしょうか？「見よ、子どもたちは主の賜物（＝財産・相続地の意味）」（3）

子どもというのは、私たちがほとんど何も苦勞せず、たいして努力もしないのに、まさしく「眠っている間に」神さまが与えて下さるものといえます。古代の人々は、「子ども」が重要な労働力であり、戦力であり、自分たちの生活を安定させるのに欠かせないと考えました。それで、「子ども」は「矢」と表現されています。しかも、「勇士の手にある矢」ということですから、それはたとえ一本であっても「百人力の矢」ということになります。

4. 若い時の子らはまさに勇士の手にある「矢」のようだ。

5. 幸いなことよ。

矢筒をその矢で満たしている人は、

彼らは、門で敵と語る時にも、恥を見ることがない。

ですから、子だくさんは、自分の家の力であり、経済力であり、戦力であり、将来を保証してくれる安定をもたらすと考えました。

このような、まさに「生きた力ある財産」と言える子室に注目するならば、それは全く完全に神さまの賜物です。100%神さまのプレゼントです。人間が自分の力や努力によって得るものではありません。神さまが下さるものです。神さまが、無料で、ただ恵みによって与えてくださるものです。私たちが眠っている間に、神さまが備えて下さるものです。神さまが私たちが愛してくださるその証しとして、私たちに与えて下さるものなのです。

だから、結論は何だということでしょうか？だから、神さまが重要だということですから。（この話は、だから子どもが重要だという話ではなく、子どものことは「見よ」という単なる一つの実例に過ぎない。）メインの話は、1節、2節に戻るのです。

つまり、

1. 主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなし。

主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなし。

ここに戻るのです。

つまり、子どもの実例が示す通り、やはり「家を建てる」のは神さまです。神さまが、家を建ててくださいます。神さまが、私たちの生活を守ってください。必要な一切のものを与えてくださいます。私たちが愛するその御愛の故に、すべてのものを与えてくださるのです。

思うに、そもそも、私たちが所有しているものはすべて神さまが与えてくださったものです。財産も、能力も、力も、意欲も、健康も、家族も、友人も、地位も、名誉も、そしてこのいのちも、すべては神さまが下さいました。神さまからいただかなかったものは何一つありません。頭のとっぺんから足のつま先に至るまで、私たちは、例外なくすべてのものを神さまからいただきました。私たちの生きている存在それ自体が、神さまの愛を証しするものです。神さまに愛されているから、こうして生きているんですよ。神さまに愛されていなかったら、私たちはこうして生きていません。今頃、殺されています。永遠の滅びに投げ入れられています。でも、今、現に、いのちが与えられています。生かされています。これは、神さまにただ愛されているからに他なりません。使徒パウロの言うように、「今あるはただ神の恵み」なのです。

これほど神さまがすべてを備えてくださっているのに、どうして私たちは、自分の家のことは、自分中心に、自分の力で建てようとするのでしょうか。自分の力で自分の人生の安定を図ろうと思いついて努力するのでしょうか。自分の知恵に頼るのでしょうか。あるいは、人のせいにするのでしょうか。自分の生活がつまらないのは、人のせいですか？自分の人生がうまくいかないのは、誰のせいですか？家庭がうまくいかないのは、誰のせいですか？

私たちのせいです。私たちが、自分で家を建てるからです。自分で守ろうとするからです。

127篇の詩人、ソロモンは、そのような私たちに言い放ちます。

1. **主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなし。**
主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなし。
2. **あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧を食べるのも、それはむなし。**

これは彼の実感こもった言葉です。神さまがなさるのでなければ、すべては「空しい」、意味がない、価値がない、徒労に終わるのです。ならば、私たちは、如何に生きるべきでしょうか。「主が家を建てる」「主が町を守る」一家の中心は主であると、心得ましょう。そして、主を中心に、家庭を形成するのです。神さまから学びましょう。神のことばを聞きましょう。神さまを頼りましょう。神さまに祈りましょう。神さまの御意志を行いましょ。神さまを喜び、神さまをあがめ、神さまの恵みに感謝して、神さまから受けた愛を家族にあらわしましょう。神さまのすばらしさを証しして、神さまの栄光をあらわしましょう。そうする時に、私たちは、決して「空しく」ありません。

ここに家庭が存在する大切な意味と目的があります。「主が家を建てる」

家庭とは、「家を建てる」主のすばらしさを証しするためにあります。神の栄光をあらわすために、神さまは家庭を創造なさいました。家庭の究極の目的は、家を建てた神の栄光のためです。私たちの楽しみのためではありません。人間中心に考えてはなりません。神さまを中心に考えなければなりません。

それでは、神さまは、いったい何のために家庭をお造りになったのでしょうか？どのような意味と目的で家庭を創造なさったのでしょうか？それは、神の栄光をあらわすためです。人間の自己満足のためではありません。お国のためでもありません。神さまのためです。神さまの栄光のためです。神さまの栄光をあらわすためです。勿論、神さまは、家庭が不幸になることを願っておられません。家庭が幸せになることを何より願っておられます。しかし、それが最終目的ではありません。その家庭が順風満帆に、何事もなく、平々凡々と、幸せに暮らすことが究極の最終目的ではありません。それではまだ半分なのです。中途半端です。家庭の究極の目標は、神の栄光をあらわすことです。神の栄光のために仕えることが、家庭の究極の目標です。

神さまは、ご自身の栄光のために、家庭をお造りになられました。ご自身の栄光のために、その家庭を祝福なさいます。ご自身の栄光のために、その家庭に必要な一切をお与えになります。富をお与えになります。職をお与えになります。健康をお与えになります。娯楽をお与えになります。日ごとの糧をお与えになります。良き家族の団らんや隣人をお与えになります。平安と喜びをお与えになります。イエスキリストを信じる信仰とたましいの救いをお与えになります。教会生活と宣教の使命をお与えになります。これらすべては、何より神の栄光のためです。神さまは、ご自身の栄光のために、これらの祝福を私たちの家庭に満たして下さっているのです。それは決して私たちの自己満足のためではありません。人の欲に仕えるためではありません。神さまは、ご自身の栄光のために私たちの家庭に祝福を注いで下さるのです。ここに、家庭の意味と目的があります。ですから、最高の家庭の理想とは、神の栄光をあらわす家庭です。勿論、家族の全員が、健康にも富にも恵まれて、何一つ不自由なく幸せに生活できることは良いことでしょう。

しかし、それが家庭の究極の理想ではありません。それだけでは中途半端なのです。というより、それらが何一つなくても最高の理想の家庭もあり得ることを私たちは理解しなければなりません。すなわち、たとえ貧乏でも、みんな病気で、社会的な地位や名誉にも恵まれず、あらゆる物に欠乏しても、しかし最高に理想的な家庭というもあり得るのです。そうでなければ、殉教者の家庭は最も悲惨な家庭ということになってしまうからです。人間的な、この世的な価値基準で評価したら、殉教者の家庭ほど惨めなものはありません。

主のために苦難を負った家庭は全く非理想的で、何にも主のために犠牲を払わぬ悪人の家は栄えて豪邸に住み、何一つ非自由なく贅沢に暮らしているとしたら、どうでしょうか？そのような家庭が、聖書の教える理想的な家庭なのでしょうか？そのような家庭を、私たちキリスト者も目指すべきなのでしょうか？絶対にそんなことはありません。主が家を建ててくださる、私たちを愛して、私たちの家を建て、守ってくださる、だから、その主のすばらしさを証しして、神の栄光をあらわす、ここに家庭の理想があります。神の栄光をあらわす家庭が最高の家庭です。理想の家庭です。たとえ、金が無くても、苦難を味わっても、主の栄光をあらわす家庭が最高の家庭です。金があるか無いかは二の次です。私たちが幸せかどうかも二の次です。大切なのは、神の栄光です。神の栄光をあらわすか否かが重要です。

主が家を建ててくださる、主が家を守ってくださる、主は我が家の主である、だから、この主のすばらしさを証しして神の栄光をあらわす、ここに家庭の理想があります。ここに集うみなさんが、「家庭を建ててくださる」主に感謝し、神の栄光をあらわす家庭を築いていかれるよう主の御名により祈ります。